

〔比古婆衣三〕口女

因に赤女のことを考ふるに、鯔の類に目と唇の朱らみたるがあるをシクチといへり、中出羽の秋田わたりにては、鯔をシロメといひ、まぐちをアカメといふ、中と、その國人かたれり、このアカメといへる、決して古名の遺れるなるべし、但し、紀に赤鯛魚也、と書るは、漢名に當たるなれど、その當否はおぼつかなし。

〔日本書紀八仲哀〕三年六月庚寅、天皇泊于豊浦津、且皇后功神、從角鹿發而行之、到淳田門、食於船上、時

海、鯔魚多聚、船傍、皇后以酒灑、鯔魚、鯔魚即醉、而浮、而時、海人多獲其魚、而歡曰、聖王所賞、賞恐之魚焉、故其處之、魚至于六月、常傾浮如醉、其是之緣也。

鯛雜載

〔萬葉集九雜歌〕詠水江浦島子一首并短歌

水江之浦島兒之堅魚釣鯛釣於略下

〔萬葉集十六有由緣并雜歌〕詠酢醬蒜鯛水葱歌

醬酢爾蒜都伎合而鯛願吾爾勿所見水葱乃煮物

〔古今和歌六帖三〕たひ。

逢事をあこぎの島にひくたひのたびかさならば人もまゐりなん

〔散木春詞集六悲歎〕ひくしまといふ所のあまどもくたりにもまうできて、ものども心きして侍け

るが、このたびもまうできて、鯛といふ魚をとりいで、侍けるを見でよめる。

たつ浪のひく島にすむあまだにもまたたひらかに有ける物を

〔延喜式四時祭〕春日神四座祭

祭神料略中 鰻堅魚、鳥賊平魚、海藻各六斤、散祭料略中 鰻堅魚、平魚各六斤

〔延喜式二十四主計〕凡諸國輸調略中 雜魚、楚割鯛、球割鯛、臘、曬腊各十六斤、十兩